研究論文

山形県酒田の市街地におけるクロマツ風景の特性

Feature of Black Pine Landscape in the Urban Area of Sakata City, Yamagata Prefecture

伊　藤　　弘*
Hiromu Ito

要　旨：クロマツ海岸林が形成されることで市街地が発展してきた山形県酒田市におけるクロマツの風景の特性を，海岸林の見える範囲（視覚の風景）およびその変遷（視覚と意味の風景）と身近な公共の場である神社境内地内の植栽林におけるクロマツ（意味の風景）から明らかにすることを目的とした。現地踏査および文献調査による結果，酒田では海岸林の見える範囲は狭いものの，自然発生的な海岸林利用の場を踏襲した海岸林の見える都市施設が整備されていた。また，神社植栽林においてクロマツが多く植えられていた。以上より，酒田では，視覚の風景を意味の風景が補っており，これによって地域特性とクロマツが結び付きやすい状況にあったといえる。

はじめに

山形県酒田市は日本海沿岸に位置し，藩政時代より本間家など複数の篤志家たちによって海岸汀線沿いにクロマツ海岸林が形成され現在にいたる（立石, 1989）。海岸林は砂や潮による被害を防ぎ，それによって砂丘に隣接した市街地が発展してきた。しかし，明治以降市街地の発展および近代化に伴い，地域住民や行政の海岸林に対する価値づけが希薄になった（伊藤, 2006）。高度経済成長期には地域住民の反対なく海岸林を伐採して酒田北港が計画・建設されるなど海岸が改変され，それに伴って海岸林も大きく衰退していった。

しかし，1998年に発生した雪害による倒木を契機に，地域住民の発意によって住民・行政・森林組合等の連携による海岸林管理が取り組まれるようになった（櫻井，2006）。こうした地域住民たちによる活動は，自然や環境への一般的な関心の高まりによる影響もあろうが，その活動の対象が海岸林になるということは，働きかける対象である具体の空間・環境に対して愛着を喚起させるような，地域全体に共通する何らかの認識が生成されたためと考えられる。具体の空間や環境に対して何らかの共通認識が生成されるということは，海岸林が住民に対して風景となっていることを示す。

風景には，視覚の風景（視覚像に近い）と意味の風景（信仰や和歌など言語や観念に近く，意味から想起される視覚像）があり，双方から把握する必要がある（西田，1999）。祭りなどの非日常の活動が営まれる場所や，古くより体験されてきた眺めが継承されている場所など，見る場所が意味を有することで場所から想起される視覚像も意味の風景である。したがって，意味の風景は，対象をどこで見るかという域内での場所の位置づけ（人間の活動と関係した）とかかわっていると考えられる。

酒田でみられたように空間や環境が変容しない伐採計画に対して地域住民による活動が起こらず，倒木によってそれまで海岸林のあった空間や環境から海岸林がなくなるという変容によって地域住民による活動が発生したという変化は，共通認識の生成という観点か

* いとう　ひろむ・東京大学大学院農学生命科学研究科
キーワード：クロマツ，海岸林，風景

ら，次のように整理される。

まず，倒木による空間が変容するまでは海岸林に対して地域全体に共通した認識は生まれておらず，あくまでも地域住民個人の体験に基づいた認識にとどまっていた。空間の変容を契機に，個別に認識されていた海岸林が，地域にとってなくてはならないものという共通認識となって管理活動に結びついたと考えられる（安彦ら，2002）。こうした認識が生まれる条件を整理することは，今後の地域計画や景観計画を策定していくに当たって求められるところである。

本研究は，海岸林を風景としてとらえるために，日常生活における海岸林の見える範囲（視覚の風景）を現地踏査から把握すると同時に，過去の地形図や史料を用いて海岸林の見える範囲の変遷を推察する（視覚の風景であるとともに，海岸林の眺めが継承されつづける場所においては，その体験が継承されてきたという意味が場所に付与されることで，場所から海岸林が想起されるという点で意味の風景ともなる）。

また，身近な公共の場であり，祭事など年中行事とあわせて地域の性格づけにもかかわっているといえる神社の境内地内におけるクロマツの植栽状況およびそのクロマツの知覚されやすさ（海岸林を想起させるという点から意味の風景となる）を把握することで，酒田市におけるクロマツ風景の特性を明らかにし，海岸林に対する共通した認識が生じた要因を考察することを目的とする。酒田における神社におけるクロマツの植栽は，既往研究にて調査されている（伊藤，2008）が，本研究はクロマツを見ることができる場所の地域内での位置づけを読み取り，その意味づけを考察するものである。

1．研究の方法

1.1　対象地

対象地は山形県酒田市の市街地である。酒田市は，日本海沿岸の庄内砂丘に位置している。前述したとおり藩政時代から複数の篤志家により海岸汀線沿いに市域に隣接して広大な庄内海岸林が形成されてきた。しかし，明治以降の近代化とともに海岸林は荒廃した。砂による害が甚大であったころの様子は安部公房の小説「砂の女」のモデルにもなったほどである。戦後は国による海岸砂地地帯振興事業によって植林事業が行われ現在に至る（酒田営林署，1983）。庄内海岸林は最上川をはさんで北と南（川北・川南）で大きく形態が異なっており，川北の海岸林は主に一団の国有林であるのに対し，南は主に筋状の民有林である。酒田市の市街地は最上川北部および南部に位置している。

本研究では藩政時代より市街地として発展してきた最上川北部の市街地（DID）を対象地とする。対象地はもともと港町として栄えてきており，現在は国有林とわずかに接している。1966 年に酒田北港の増築計画が策定され海岸林は伐採されたが，計画策定時には地域住民による反対運動は発生しなかった（実際は予算の縮減等で計画策定時よりも大幅に伐採面積は縮小した）。しかし，前述したように 1998 年の雪害による倒木を契機に地域住民の発意による管理活動が展開され，現在では行政や森林組合と地域住民団体が連携して管理に当たっている。

1.2　調査方法

まず，日常生活における海岸林の見える範囲（視点場分布）を把握するため，現地踏査を行った。市街地内のすべての街路および海岸林を眺めることのできる屋外活動を伴う都市施設（競技場などのレクリエーション施設や学校）・観光資源を対象に視点場の範囲を住宅地図上に記録した。街路上の視点場は，同一街路において海岸林が見えはじめてから見えなくなるまでの距離が 50 m以上のものを対象とした[1)]。

1912 年以降に作成された地形図から，市街地内の街路上の視点場分布の変遷を，明治から昭和にかけて撮影された写真や絵葉書，名所案内などのガイドブックから海岸林を眺めることができる野外活動を伴う都市施設や観光資源の視点場分布を同定し，その変遷を地図上に記録した。街路上の視点場分布は，現在の視点場における街路・海岸林・住居の位置関係を参考に，時代ごとの街路・海岸林・住居の位置関係を把握し推定した。使用した地形図は，1916 年・ 1955 年・ 1975 年・ 2000 年の 5 万分の 1 地形図である。

次に，神社境内地の参道から社殿までに植えられている植栽林におけるクロマツの植栽状況を把握した。神社の境内地は地域団体である氏子により管理され，また祭事において地域住民が集まりやすく，地域にお

ける特定の性格づけがなされうる場所でもある。植栽林の樹種を把握し，祭事など非日常の活動における住民の集まりやすさを調査することは，域内におけるクロマツに関する意味の風景を表しているといえる。神社境内地内植栽林でのクロマツの植栽状況は，地域における当該場所の性格づけを把握するために，地域住民のクロマツの知覚しやすさという観点から調査指標を設定し把握した。具体的には，植栽林におけるクロマツの他樹種との多少，人が集まりやすいか否か（神社併設施設の有無，寺院との併設，年中行事），である。これを地図上に記し，前述の視点場分布との位置関係をみた。

2．視点場の分布とその変遷（図1）

2.1　視点場の分布

対象地は海岸林とわずかに接しているため，街路上における視点場の分布は狭い。港町特有の格子状の街路では見通しはきくものの，そこでは海岸林と接しておらず港と接しているため，海岸林は見えない。また，海岸林が見える場合，街路上の視点場からは，海岸林は街路と並走して見え，アイストップには見えない。一方，野外活動を伴う都市施設等の視点場は，海岸林と市街地の境界部に多く存在している。しかし，海岸林から離れ視点場となっていない都市施設の方が多い（図1の2000年）。

2.2　視点場分布の変遷

視点場分布の変遷を整理すると，時代区分は大きく明治～戦前（1873～1941年），戦後～地域開発期前（1945～1954年），地域開発期（1955～1980年），地域開発期後（1981年～　）に分けられた。

1）明治～戦前

最上川沿いは大正時代から荒地であったが，そのなかで唯一クロマツのあった日和山は明治以前より人びとが利用していた。1916年には大正天皇即位記念事業の一環で日和山公園として改造され現在に至っている（佐藤，1982）。日和山公園は1912年の『酒田案内』では名勝とされ，以下のように松林と出羽三山の景色が讃えられている（中村，1912）。

「當町西北隅に在り，水面より高さ五丈更に高く日和山及旭山あり，三山を茫野翠林の間に仰ぎ，波渡崎，太師崎南北相擁して佐渡嶋，粟生嶋飛嶋を彷彿の間に望む。夕陽将に碧海に没せんとし，帰帆最江に入り，黒燃（原文ママ）西海に靉靆たるの時，金波翠松相映し，感興沸くが如し，…」

一方，市街地と海岸林の境界部に位置している光ヶ丘松林は大正中ごろまでは本間家が所有しており，林内に自由に出入りできた。地域の住民たちは，散策以外にも春は松露とり，秋はキノコ狩りなどを行い行楽地として利用していた。また，海岸林に隣接し海水浴場として賑わっていた大浜海岸は，海岸林と一体的に散策ルートとして地域住民たちに利用されていた。この松林は，1919（大正8年）年に町が借地して運動場を設け，市内合同運動会などが催され，戦後には陸上競技場や市営プールが整備され，山形県の大会なども開かれた（佐藤，1982）。

このころは海岸林に隣接した学校はなかったものの，運動場の狭い学校では運動会を松林に囲まれた道

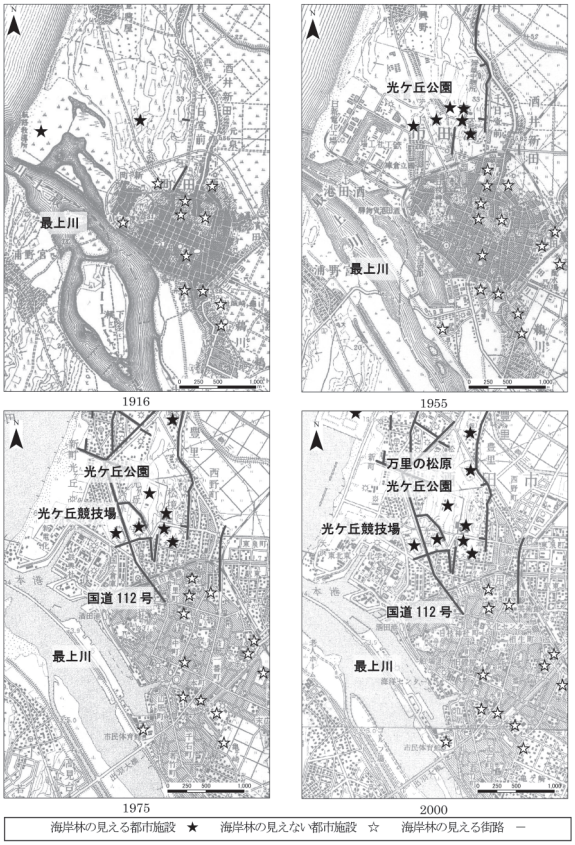

図1　視点場の変遷

路で行なっていた（佐藤，1982）。これら運動会の行なわれていた松林は前出の『酒田案内』において以下のように名勝としても紹介されている（中村，1912）。

「町の北端，海岸一帯の松林，之を長坂林と云ふ，帚婦常に入り，亦落葉の影を止めず，林間往々圃地桃林有り，漫歩に宜く，納涼に宜く，茸狩に宜し。誠に顯たる自然の一庭園なり。近時保安林に編入せらる」

このころはほとんど市街地から海岸林が見えることはなく，また学校など都市施設も市街地中心部に多くが位置しており，海岸林は前述のレクリエーション利用される時にのみ住民が知覚していたことがうかがえる。

2）戦後～地域開発期前

戦時中，海岸林では松根油が採取され，海岸林に隣接した競技場や学校の校庭も含めてすべての空地は食糧難の対策として開墾されていた。

戦後，酒田では海岸林を伐開して団地造成が盛んに行なわれ，それにあわせて学校が複数設置された。また，それまで住民たちがレクリエーション利用していた海岸林の一部が光ヶ丘公園として整備された。一方，海岸林と接して一体的に利用されていた大浜海岸は1936年に大浜工業地帯として開発され，海水浴場として使えなくなってしまい（佐藤，1982；佐藤・伊藤，1975），住民たちと海岸は工業地帯によって隔絶してしまった。

このころは，海岸林が国道沿いに植林されており，街道沿いに海岸林を見ることができたと推定される。

3）地域開発期

海岸砂地地帯農業振興事業による海岸林の植林もほぼ完了し（酒田営林署，1983），現在の海岸林の特徴でもある一団の海岸林が形成された。また，海岸林を伐開し，一部を街路沿いに残しながら宅地が整備され集落と市街地が一体的になった結果，市街地における街路上の視点場が拡大していった。街路上および都市施設における視点場分布は，その後現在に至るまでほぼ変化していない。また，本間家の所有していた海岸林が一部市に上納され，そこに競技場が整備されることで，都市施設の視点場が増えることとなった（コミュニティ新聞社，1998）。

4）地域開発期後

小学校の統廃合により海岸林の見えない都市施設がなくなったほかは，地域開発期における視点場の変化はない。光ヶ丘公園に隣接した海岸林が「万里の松原」としてレクリエーション利用のための整備がなされるようになり，海岸林の見える都市施設が増えた。

以上，都市施設上の視点場分布の変遷を整理すると（表），自然発生的に地域住民たちが利用していた場所および活動内容を原則踏襲して都市施設が整備されてきたことが分かる。

3．神社境内地内のクロマツ

3.1　神社境内地内植栽林におけるクロマツ

対象地内の半数以上の神社境内地内の植栽林にはクロマツが植えられており，他の樹種と比べてクロマツが多い神社とクロマツだけが植えられている神社の数がやや多い（44件中22件）。また，公園や公民館などの施設が併設されている神社や，寺院内に併設されている神社の多くはクロマツが植えられており（11件中10件，2件中2件），地域住民がクロマツを知覚しやすい状況にあると考えられる（図2）。

3.2　海岸林に対する視点場とクロマツのある神社

2．で把握した海岸林に対する視点場の分布とクロマツの植えてある神社の分布の関係をみると（図3），クロマツの植えられている神社は視点場ではない街路に多く存在し，視点場となっている街路や都市施設に隣接している神社が少ない。とくに，視点場となっていない都市施設の周辺にはクロマツのみもしくはクロマツが多く植えられている神社が多く存在しており，海岸林のクロマツと神社境内地内のクロマツのどちらかが見える状況である。

表　酒田における都市施設での視点場の変遷

明治～戦前期（1873～1941）	戦後～地域開発期前（1945～1954）	地域開発期（1955～1980）	地域開発期後（1981～　）
運動場	競技場・野球場 学校	競技場・野球場 学校	競技場・野球場 学校
行楽地	公　園	公　園	公　園 行楽地
	工業地帯の造成	汀線沿いの植林完了 酒田北港の拡張計画	「万里の松原」 命名

注）下線は海岸林の利用，網掛けは海岸林に関連する動向

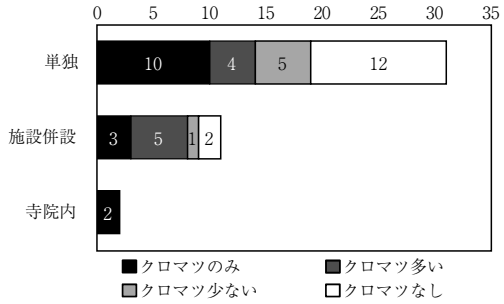

図２　対象地域内での神社でのクロマツ植栽

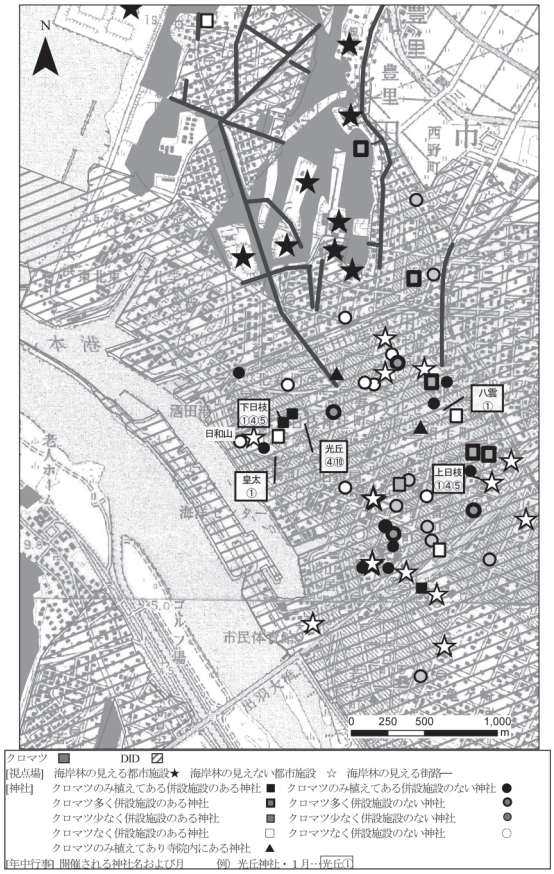

図３　対象地での海岸林に対する視点場と神社境内地内のクロマツ

3.3　対象地内神社における年中行事

対象地に存在する神社での年中行事と植栽の関係をみた。どこの神社でも行われている夜会式（よいしき）を除いた祭事は，植栽林にクロマツだけが植えられている神社でのみ行われている（図3）。これら神社の面積はいずれも 1500m² 以上あり，およそ 3/4 が 1000m² 以下である対象地の神社のなかでは比較的広い面積であった。

海岸林の植林だけでなく新田開発などにも注力した本間光丘をたたえて建立された光丘神社では，4月と10月に春祭り・秋祭りを行っている。光丘神社の植栽林はクロマツのみ植えられている。酒田市において一大祭事である酒田まつり（旧山王祭，5月）の拠点である上日枝神社と下日枝神社（酒田市，1987）においても，植栽林にはクロマツのみ植えられている。上・下日枝神社では，そのほか，1月に松例祭，4月に湯立神事が行われる。また，皇太神社は1月に獅子舞が，八雲神社では星祭りが行われる（酒田市，1989）。

いずれの神社でも，植栽林にはクロマツだけが植えられている。上・下日枝神社では，いずれも明治期よりクロマツが植えられている様子が確認できる（佐藤，1982）。また，下日枝神社・光丘神社・皇太神社は本間光丘が築山したといわれる日和山およびそれに続く山王の杜に位置しており，対象地域において中心となる場所であることがうかがえる。日和山およびそれと隣接している山王の杜にはクロマツが多くみられるが，これら神社からは海岸林を見ることができない。

おわりに

酒田市の市街地においては，海岸林に対する視点場の分布は海岸林近辺に限られており，「視覚の風景」は限定的であった。しかし，海岸林を見ることができる都市施設は，明治期以降自然発生的に住民が利用していた場所を踏襲して整備されている。継続してそこから海岸林を見ることができるということは，かつての住民たちが体験してきた風景を現在も体験し，地域特性を反映した活動を伴う眺めを体験できる場所という意味が都市施設に付与されたことになる。したがって，都市施設から見える海岸林は「視覚の風景」および地域の文化を引き継いできた都市施設から海岸林が想起される「意味の風景」とすることができる。しかし，これら視点場分布は海岸林近辺に限られている。

一方，神社境内地内にはクロマツが多く植えられており，祭事などで対象地において中心性を有していると思われる神社にはクロマツだけが植えられており，クロマツを通して海岸林が想起される「意味の風景」

とすることができる。こうして視覚の風景を意味の風景が補い，海岸林と地域特性を結ぶ役割を果たしていることがうかがえる。これにより，住民（視点）と海岸林（視対象）のあいだに表象が生まれ，地域に共通の認識が生まれやすい状況ができあがっていたと考えられる。

今後は，景観計画においても本研究で示したような視覚の風景と意味の風景双方を踏まえることが求められる。そのためには，かつての地域における住民たちの活動などから地域の中心を見出すなど，地域における場所が保有してきた諸活動や意味合いを踏まえた風景づくりが求められるところである。

補　注

1) 主要街路の交差点間平均距離が約 50m だったことによる。

参考文献

伊藤　弘（2006）秋田県能代と山形県庄内における海岸林に対する評価の差異の形成．ランドスケープ研究，69 (5)，365 ～ 368.

伊藤　弘（2008）本荘と酒田における市街地での神社の植栽を中心としたクロマツの見え方の差異. ランドスケープ研究, 7(5)，679 ～ 682.

コミュニティ新聞社（1998）われらかく戦えり（上巻）．コミュニティ新聞社，酒田，283pp.

西田正憲（1999）瀬戸内海の発見―意味の風景から視覚の風景へ．中央公論新社，東京，263pp.

酒田営林署（1983）海岸治山事業概要．pp.5 ～ 11，酒田営林署，酒田.

酒田市史編纂委員会編纂（1987）酒田市史（上巻）．pp.928 ～ 936，酒田市，酒田.

酒田市史編纂委員会編纂（1989）酒田市史改訂版（別巻）．pp.487 ～ 500，酒田市，酒田.

櫻井輝夫（2006）脳卒中後遺症の明と暗．文芸社，東京，143pp.

佐藤三郎（1982）ふるさとの想い出 酒田．国書刊行会，東京，166pp.

中村禎吉（1912）酒田案内．中村書店，酒田，pp.130.

佐藤三郎・伊藤善市（1975）日本海今と昔．pp.44 ～ 45，山形新聞社，山形.

立石友男（1989）海岸砂丘の変貌．大明堂，東京，214pp.

安彦一恵・佐藤康邦 編（2002）風景の哲学．ナカニシヤ出版，東京，256pp.

（2010.6.15 受付，2010.12.22 受理）

Abstract: The urban area of Sakata was developed because black pine coastal forest was formed. This study was aimed to clarify the landscape feature of the black pine tree in Sakata City, Yamagata Prefecture. In this study, landscape is investigated from the range where the coastal forest can be seen（scenery landscape）, its change（scenery and symbolic landscape）and a black pine in the afforested area of the Shinto shrine precincts grounds（symbolic landscape）by local survey and literature survey. As a result, the range of places where coastal forest can be seen is narrow. But the urban facilities where coastal forest can be seen were established on the activity places where was generated automatically in the coastal forest. And black pine tree is planted in the most of Shinto shrine. So it can be said that local residents can connect the black pine with regional feature easily, because scenery landscape is supported by symbolic landscape.

Key words: coastal forest, black pine tree, landscape